

新生祭言行録 Scene1 <カヌ・エ・センナ>



新生祭言行録  
scene1  
<カヌ・エ・センナ>

※ このお話は「Final Fantasy XIV 新生エオルゼア」の世界観を元に書かれた二次創作です。苦手な方は閲覧を控えて頂けますよう、お願い致します。

「カヌ・エ様、そろそろ式典のご挨拶のお時間です」

ふと……後ろから、まだあどけなさの残る若い青年の声が届く。

私は振り返らず、わかりました…と一言だけ返し、目を伏せる。顔を見ずとも声だけで分かった。

彼はかつて、第七霊災の折に瀕死の状態から救うことが出来た数少ない命…。

今にも命の灯火が潰えようとしていたあの瞬間から生還出来たのは、紛れも無く彼の「生きたい」という思い力。私が施した治療など、ほんの些細な手助けに過ぎない……。

”第七霊災”——。

あの時私が出来たことといえば、本当に最後の最後、撤退の決断を下しただけ…。

前線で勇敢に戦い、荒れ狂う火の粉を身に受けながら、何度も立ち上がり最後まで戦い続けた兵士達を、ただ…遥か上層から見下ろしていた。

一人…また一人と倒れていく様を見ながら、私はどうしてこの戦いを喰い止められなかったのかと嘆いていた。

出来ることなら、すぐにでも前線に駆けつけて猛る兵士たちに少しでも癒しの手を差し伸べたかった……。

『起こってしまったものは仕方が無い。今はただ、この戦いに勝つことのみ』

そう豪語するラウバーン局長。彼の言葉は、私に力と度胸を与えてくれる。

『そう悲観することは無い。仲間を信じろ。この戦いで我々の強さを、帝国軍の奴らに見せつけてやろうではないか』

戦況を鋭い目つきで俯瞰するのはメルウィブ提督。

彼女の言葉は、私に勇気と仲間を信じる強さを与えてくれる。

でも、でも……。

『違いますッ！！』

私は思わず叫んでいた。違う…違うの……！

このような戦いや、災厄を未然に防ぐ為に私はグリダニアの党首となった。なのに、これではまるで……。

このような状況になっても、私は彼らに癒しの手を差し伸べることすら出来ないなんて……。不甲斐なさや、無力さや、後悔や。

ただただ、リンクシエルから流れる戦況や、兵士たちの慌しい報告を聞いている自分が、惨めに思えて仕方がなかった……。

……。

……………。

**「私はまだ、党首としても、巫女としても未熟者……」**

つと、口を付く情けない愚痴。かの”後悔の災厄”に思いを馳せた。

窓辺から望むグリダニアの街…。今でこそ、この穏やかな街並みを取り戻したけれど、ここに至るまでの復興の道のり。決して、平坦では無かった。

あれから5年、グリダニアが両手に抱えるシルフ族、イクサル族との関係。黒衣森の精霊問題、三国が頭を悩ませる軍事問題、そして神降ろし…蛮神問題。

いつまでも過去を悔やんでばかりでは前に進めない。救えなかった命を嘆くのは今ではない…今は救えた命を心の糧にして、ひたすらに進んできた日々。

問題が山積みの中、暁の者たちや冒険者がいなければ一体どうなっていたことか…。

双蛇党の守人たちも、皆よく頑張ってくれている…。

それなのに、私は——。

**「俺は、そうは思いません」**

ハッとして振り返る。

先ほどの護衛の青年は、この場を去らずに控えていたようだ。

**「…恐れながら。俺はもともと、帝国にいた人間です。小さい頃から、戦争の為の訓練を強いられてきました。キツイ、辛い、もう死にたい…。そう思いながら、ずっと訓練を受ける日々に嫌気が差していたんです。……そんな折に、あのカルテノー平原の戦いが始まり、俺は志願しました。前線で、戦うことを——」**

彼は語ってくれた。

幼少の頃から徴兵され、ただ力を付ける為に訓練に明け暮れた日々のことを。そして次第に、戦いを求めることへの疑問を抱きながらも終わらない訓練の日々に、心まで疲弊していった顛末を…。

帝国が国民に対してどのような政策を強いていたかは分からない。彼の話を知るならば、まだ身も心も成長していない幼い子供まで、戦争の為に訓練をしていたという。

訓練とは、日々鍛錬に明け暮れる稽古とは違う。それについて来れないものは容赦なく切り捨てられ、耐えられたものだけが残っていく試練と同じ。

成長した青年が受けるならまだしも、そんな訓練を幼少の頃から強いられてきた子供は、精神的にも肉体的にも追い詰められて脱落するか……もしくは、なんとか食い下がったとしても、心に大きな傷痕が残ってしまう。

だから彼が、“死に場所”を求めていただろうことは想像に難くなかった。

「当然、前線へ出れる兵士は腕の立つ猛者ばかり。当時、俺のような子供が戦力とみなされることはなく、後続の部隊に編成されることになりました。ただ、俺にとって、あの戦いの勝敗はどうでもよかった……。戦場に出れさえすれば、俺はそれで良かったのですから……」

あの戦いは、すべての者が「生きよう」とした戦いではなかった。

ただ力を誇示したい者、勝利を掴みたい者、復讐に心を支配された者…。その陰に、この青年のような兵士も少なからず居たのでしよう……。

彼は後者であった。訓練には必死についていけたものの、心に大きな傷痕を抱えてしまった彼は、「生きる」ことへの執着を失ってしまったのだ。

「そして、あの…魔導アーマーの部隊が前線に出たとき、多方面から攻めてくる単機の兵士たちに戦線は乱されました。…今なら分かります、あれが冒険者だったのですね。凄まじい気迫でした。単機だと思わせたのも束の間、後方からの援護射撃は無数に弾け、隙を付いての攻撃魔法は辺り一帯を炎で包み込みました。そのさらに後ろでは回復支援の詠唱が途切れることなく、味方を癒し続けていて…。8人パーティだと気づいた頃にはその鮮やかな連携に、2部隊…3部隊と沈められていたのです。その力は圧倒的で、あの魔導アーマーにすら臆することなく立ち向かう彼らはまるで、戦神ハルオーネの加護を受けているのではないかと思ったほどです」

そう、冒険者の力は未だ計り知れない…。今や蛮神をも退けてしまうほどの力。あの戦いで、かの者たちの活躍があったのは云うまでもないでしょう。

それは今では「光の戦士たち」として語り継がれているけれど、鬼気迫る勢いで攻勢した彼らのことを思い出そうとしても、それ以上のことは日に焼けた書物の如く思い出すことは出来ない。

「目を奪われたのも束の間。俺はその混乱に乗じて、部隊を離れました。次々と薙ぎ倒されていく魔導アーマー。…俺はようやく、そこに見出したのです。ここが、俺の死に場所だと……」

「っ……。ひょっとして、あなたは——」

突然、フラッシュバックのように記憶が蘇る。彼を見つけたときのことを。彼は魔導アーマーの下敷きになっていた。それは、つまり……。

「…お察しの通りです。俺は自ら、倒れる魔導アーマーの下に飛び込みました。そして無数の矢が降り注ぐ中、手脚に矢を掠めながら、魔導アーマーの硬い装甲に押しつぶされました。幸い…と言って良いか分かりませんが、先に頭に衝撃があったのですぐに昏倒しました。だから、痛みはほとんど感じる間もなく俺は、死んだと……思いました」

幸か不幸か、彼は致命傷を避けられた。…いいえ、死して幸いなどということはありません。

一命を取り留めたことはたとえ奇跡だとしても、彼が死に場所を探していたとしても、彼が生きてくれたことは僥倖なのだと……。

「目を覚ましたのは、足の痛みからでした。骨が折れていたのでしょう、その激痛に呻きながら、しばらく床を掻き雀りました。もうこのまま死なせてくれ…そう思ったとき、カヌ・エ様。あなたと出会いました」

まっすぐに私を見つめてくる彼の眼差しは生気に溢れ、とてもかつてのような死に場所を求めている目ではなくなっている。

「生きよう」という意志が瞳に宿り、それが今の彼のすべてに繋がっていた。

あれから5年……彼は双蛇党に入隊し一から己を鍛え直した。槍術士のギルドマスター、イウエインに預けて良かったと思ってる。

…もちろん初めは生きる屍のようだった。生きる意志を失くした心は、そう簡単には立ち直らない。

死に場所を求め、自らを死地へと投げ出したのだから…。さらに、死ぬことも出来ず、どうして今自分は生きているのかと自問していたに違いない。

それを一喝したのが、イウエインだった。

イウエインは彼の魂を呼び戻した。彼も第七霊災の後、ひどく気落ちしていたのを覚えている。なぜならイウエインは、あの第七霊災で戦友とも呼べる相方を亡くしていたの……。

その彼の面影を、この青年に見たのかもしれない。イウエインが掲げる槍術は「切り開く力」。その覚悟は「生きる意志」によって裏付けされている。

共に生きたいと願っていたイウエインが失った戦友——。

生きる意志を失くし、死にたいと願っていた青年——。

だから、イウエインは許すことが出来なかった。生き残った命を捨てたいと思っている青年に。そして、戦友を守れなかった自分自身に……。

そのすぐ後、イウエインが槍術士ギルドのマスターを勤めることが決定した。

翌日、イウエインは彼を諭し、根性から叩き直すと言って彼を門下に加えた。

イウエインの篤い志と、厳しい指導は彼を大きく成長させてくれた。

日々の訓練に加え、毎日のように私に挨拶に来てくれる律儀さは、今の彼の心根を表している。

もちろん、その目覚ましい成長の裏には涙ぐましい努力があったのは想像に容易。

私を慕ってくれて、今では直属の護衛の任まで勤めるほどに成長していた…。

「”赤心の前に道は開ける”」

「その言葉は……」

「カ・ヌエ様に教えて頂いた言葉です。この言葉を胸に、今まで必死に稽古を積んできました。…あの日、瀕死の状態の俺に癒しの手を差し伸べてくれた時、”生きて”と言ってくれましたね。その意味をずっと考えていたのです。双蛇党の皆を見ていると、すごく生き生きして、皆がカ・ヌエ様のことを慕っておられます。カ・ヌエ様の為なら死ねる…。カ・ヌエ様を背中に守れるなら何も怖いものはない。あなたがそこに居てくれるだけで、我々は戦えるのだと…」

「双蛇党の皆が……」

私は、大きな思い違いをしていたのかもしれない……。

私は、私を、見失っていたのかもしれない……。

彼の目を見ていると、その力強さに吸い込まれそうになる。

今は辛かった訓練ではなく、自分を成長させる為の稽古を積んでいる彼。その日々の中で、双蛇党の皆と、槍術士ギルドの門下生と共に汗を流す姿が垣間見えた気がした。

共に成長する喜びや、相手と真剣に勝負する心や、勝ち負けが決まった後のお互いを称え合う精神。そして、戦場で散るための力ではなく、生きる意志を見出すための槍術をイウエインから教授されて、ようやく彼は一つの”答え”に辿り着いた……。

「もちろんそれは、早く死にたいということではありません。一秒でも長く、一瞬でも最後まで”生きて”、カ・ヌエ様をお守りしたいという我々の誇りです」

…自然と、目頭が熱くなるのを感じる。

私はいつしか、党首としての在り方を見失っていた。このエオルゼアの地でノフィカ様の加護を授かったグリダニアには、グリダニアとしての在り方があって良いのだということを……。

ラウバーン局長のような豪快な一言で皆をまとめ、自らもその豪腕を振るいながら皆を牽引する不滅隊の力強さ。

メルウィブ提督のような篤い志で人々を纏め上げ、冷静な判断力で戦況を大きく揺るがせる黒渦団の勇敢さ。

そして、私たちの双蛇党は——。

「…ありがとう。”ウエイン”少牙士」

彼は帝国を捨て、グリダニアの民となった時、かつての名前を捨てた。

そして、師であるイウエインから名前を与えられ「ウエイン」としての生を受ける。彼がこの先も同じ志を持っていてくれるなら、私は彼をずっと見守り続けましょう…。

私はもう大丈夫。穏やかな気持ちでウエインに微笑みかけた。

「では、参りましょう…カ・ヌエ様。あなたを慕い、あなたを敬愛する民のもとへ」



——グリダニア党首…カヌ・エ・センナです。  
此度の新生祭、皆様と共に向かえられたこと、とても嬉しく思います。

……かつて、第七靈災で多くの命が失われました。  
救えなかった命に今でも胸が締め付けられます…。  
でも、救うことが出来た命はやがて立派に成長し、頼もしい大樹となりました。

このエオルゼアの地も、あれから5年の歳月を懸けて  
”新しく生まれ”変わったのです。

今日、第七西暦を一つ数えるに至りました。  
それはつまり、新しい時代への第一歩を踏み出したということです。

私たちは忘れてはなりません。  
あの災厄と、失われた命のことを後世へ語り継いでいかねばならないのです。

赤子がすくすくと大きく成長するのを見守るように。  
新芽が幹の太い大樹へと立派に育つのを陰で支えるように。

このカヌ・エ…この先もグリダニアの民と共に在ることをここに誓います。  
冒険者の皆様、双蛇党の守人たち、グリダニアに住むすべての皆…。

これからの新しい時代を、共に歩んで参りましょう——。



新生祭言行録 Scene1 <カヌ・エ・センナ>

この新生祭は三国同時に開催されている。  
同時刻、ウルダハとリムサ・ロミンサでも同じように演説が行われていた。  
今頃、各国で祝いの賛辞と歓声が響き渡っていることでしょう。

ふと——。  
不語仙の座卓の清らかな水面に浮かび上がる”14”の数字。14年後…？  
これは、宣託…？ 14年ののちに、何が起こるといふの…。

自分の胸にそっと手を添えて目を伏せる。森の囁きに耳を傾けて。

これは、胸騒ぎとは違う…。  
穏やかで、楽しい何かが始まるような、そう…まるで、期待を膨らませる胸の  
高鳴りのよう。

それは新生の刻を数え、14の年は一つの節目なのかもしれない。  
ノフィカ様の宣託か、それともルイゾワ様の試練か。それは定かでは無い  
けれど、これから始まる新生の時代に、胸を高鳴らせる自分がいた。

私は今一度、14年の未来に思いを馳せた——。

Scene1 Kan-E-Senna end...

著：ユーラ

～あとがき～

こんばんわ、ユーラです。

新生祭言行録 Scene1 <カヌ・エ・センナ>を最後まで読んで下さってありがとうございます。

この作品は、公式イベント「新生 FFXIV キャプションコンテスト」用に執筆した二次創作になります。(残念ながら文字数の関係で一部公開となりました)なので、イウェインの背景やウェイン君の逸話は非公式の設定ですのでご理解のほどよろしくお願いします。

また、1周年イベントで公開中の「第七霊災回顧録」を参考にさせて頂いている部分もございます。カヌ・エ様のエピソードは、「去りし友、来たりし友」に少なからずインスピレーションを受けています。

そこからユーラなりに想像を膨らませて書いているので、多少リンクする部分があるかと思えます。

その辺りも含めて楽しんで頂けたら嬉しいなと思えます。

さて、Scene1ということなのでもちろん続きも執筆致します。

本編中でも触れましたが、三国同時開催なので同じように式典前後の各国の党首のお話になります。

もしよろしければ、そちらのラウバーンとメルウィブのお話もお付き合い頂けたら幸いです。

## 【新生祭 見聞録】      【新生祭 近思録】

それでは、この作品はリンクフリーなので気に入って頂けたら紹介してやってください。ご意見・ご感想は[こちらより](#)どうぞ。

ただし、公式様より注意があった場合は即刻掲載を中止しますので、リンクが切れていたら、そうなったんだな・・・とご了承頂ければと思います。

改めまして、1周年おめでとうございます！

14年を目指して、着実に次は2周年に向けて歩んで参りましょう！

新生祭言行録 Scene1 <カヌ・エ・センナ>

## 新生祭 言行録 Scene1

<カヌ・エ・センナ>

記載されている会社名・製品名・システム名などは、各社の商標、または登録商標です。

Copyright (C) 2010 - 2014 SQUARE ENIX CO., LTD. All Rights Reserved.

この作品の掲載は、スクウェア・エニックス様より忠告があった場合  
即刻掲載を取り下げることをお約束します。